

自由部門

タイトル：LINE

作者：文学部日本文学科 桐田花凜

“ピコピコ” LINE を知らせる音が鳴る。

一人暮らしを始めて一年半が経とうとしている。そんな私だが、実家を離れて気付いたことがある。私は結構な寂しがりやらしい。高校生のときは、早く一人暮らしがしたくてたまらなかった。「長期休暇に入っても帰らんかもしれん！」と大口を叩いていたのはどこの誰なのだろうか。今ではできるだけ実家に帰りたいと考えてしまう。一人の方が自由も効いて、静かな空間もあって好きだと思っていたはずなのに不思議だ。辛いことがあった日でも、イライラしている日でも、私の感情に関係なく、家では誰かの声が響いていた。当時は鬱陶しささえ感じていたのに、今ではどこかでその声を求めてしまっている。“無くなってはじめて気がつく”というのはこのことなのだろう。一人大学の課題に取り組む日々。今までだったら気分転換に家族と話すことができていたのに。テレビの音だけが響く部屋で黙々と作業をしていく。今日もいつものように“ピコピコ”と通知音が鳴る。現代では LINE こそ人と連絡を取り合う一番の手段ではないだろうか。LINE を使わない日なんてないくらいに毎日誰かとやりとりをしている。今日の相手は誰だろう。勉強している手を止めてスマホの画面を覗く。珍しい。今日は3つ下の弟からメッセージが届いた。

私には弟が2人いる。仲が特別いいわけでもないし、悪いわけでもない。普通の姉弟だ。そんな弟から久しぶりに LINE が届いたのだ。連絡なんて数えるほどしか取らないのに、何かあったのだろうか。少しの緊張と共に画面を開く。

そこには写真が二枚と一言。「これとこれどっちがいいと思う？」弟は新しく買らしい洋服の候補を送ってきた。私に選んでほしいと言うのだ。それくらい自分で決めなよ、と内心思ったが、それと同時に、わざわざこんな要件で連絡してくるのもかわいいなと思った。一人暮らしをする以前もたまに実家に帰った時も、生意気でなぜか喧嘩腰に話しかけてくる弟だが、姉の意見を聞いてくるなんて、かわいらしいところもあるじゃないか。もともと口数が多いわけではない弟だから、顔を見合わせて話せば、「ん。」という反応と続かない会話。だからこの LINE は私にとってとても新鮮なものだった。スマホに向かってにやけている私。わずか数分のやりとりだが、一人暮らしの私にとっては、家族を傍に感じるには充分すぎる時間だった。それも生意気な弟からの数少ない連絡だからなおさらだ。いつもなら聞かれたことに答えて終わりなのだが、今日は私も情報提供を試みる。「○○の△△ジュース美味しいよ。勉強のお供におすすめ。」今 LINE を見返してみると、どうしてこれを送ったのだろうか、と思ってしまうほど本当にくだらない内容なのだ。私も弟には何か要件がない限りメッセージを送らないため、普段の私にはあり得ない行動なのだ。送信するとすぐに弟からメッセージが返ってきた。弟の文章をそのまま書きたいところだが、弟も公開される

と恥ずかしいだろうから秘密にしておいてあげよう。私がこの時のことをエピソードとして書いているとは思っていないだろうから。これを題材に書きたいと思うほど、私にとっては特別な出来事だったということだ。家族の中で母以外と連絡を取ることはめったにないため、弟の反応があまりにも新鮮過ぎて戸惑った。長く一緒に居るのに新しい一面を見たようで、むずがゆくなりつつも心が温かくなった。

電話は相手の顔は見えないが、時差なく会話ができる。誤解を生むことなく意思疎通することもできる。けれど、この“ゼロ距離”が相手によってはコミュニケーションの難しさを感じさせてしまうように思う。私自身、弟と電話なんてしたことがないし、したとしても最低限の会話で終わってしまうはずだ。それはきっとお互いに照れが生じてしまうからだ。文字だけの会話は淡々と進むことに冷たさを感じさせてしまうかもしれない。しかし、文字を通してのコミュニケーションだからこそ生まれる交流もあるように思う。LINE だったからこのように弟と何の気なしに会話が続いた。親しい間柄の人こそ、直接話すだけでなく、時には手紙やメールのやりとりをする。逆転的な発想だが、自分のこの体験からぜひたくさんの人に取り入れてほしいと思った。

旅行に行ったり、美味しいものを食べたり、趣味に没頭したり、“幸せ”を感じる瞬間は人それぞれ違う。家族と生活することが当たり前だった私は、一人暮らしをしたことで、支えてくれる人、気を遣わずに話せる人が傍にいたことの有難さを感じた。“無くなってはじめて気がつく”では手遅れになることがあるかもしれない。ありふれた日常の中にある幸せこそが失ってはいけないもの、そう感じることができた弟からの LINE だった。

今日も私は誰かからの通知音を待っている。